



The Japanese Group Dynamics Association

<http://www.groupdynamics.gr.jp/>

第 64 号

(2024 年 2 月 20 日)

発行所： 広島大学 坂田桐子研究室

日本グループ・ダイナミックス学会

E-mail : sec-general@groupdynamics.gr.jp

発行人：坂田桐子

編集担当：松尾和代・藤村まこと

目次

完全対面の大会を終えて	2
準備委員会企画シンポジウム 「同調現象解明に向けた学際的アプローチ」	5
特別講演を振り返って	6
コラボ・リクエスト企画シンポジウム	7
コラボ・リクエストのこれまでとこれから: コラボにいたる路を知る	7
コラボにいたる路を知りたい!	8
優秀論文賞	9
2023 年度優秀学会発表賞	11
機関誌『実験社会心理学研究』について	16
実験社会心理学研究 2023 年度 63 巻 2 号 — 掲載予定論文	16
国際化支援	17
事務局からのお知らせ	18
会務報告への J-STAGE でのアクセスについて	18
グルダイ学会関係連絡先	19

完全対面の大会を終えて

大会準備委員長

三船 恒裕（高知工科大学）

日本グループ・ダイナミクス学会第 69 回大会を、9 月 23 日、24 日の 2 日間にわたり、高知工科大学を主催校として、永国寺キャンパスにて開催しました。実に、2019 年の富山大会以来の完全対面として実施いたしました。そもそも富山大会では「対面」「オンライン」などの区別はありませんでした。新型コロナの爆発的な流行を経験し、学会大会のあり方も一気に様変わりしましたが、今回は温故知新、新型コロナ流行前の形式での開催となりました。

完全対面でしたので、参加される方には高知まで足をお運びいただく必要がありました。開催前は多くの方に来ていただけるのかとても不安でした。もしかしたら 100 人に満たない人数になるのではないかと考えていたのですが、蓋を開けてみると予想は良い形で裏切られました。参加者数は 168 人、特別講演 1 件、シンポジウム 2 件（大会実行委員会 1 件、常任理事会 1 件）、個人発表 91 件（ロングスピーチ 4 件、ショートスピーチ 36 件、English Session 5 件、ポスター発表 46 件）と、盛りだくさんのプログラムとなりました。多くの方にご参加いただき、誠にありがとうございました。ただ、予想以上の発表件数となり、並行セッションが多くなってしまいました。議論に参加したくてもできないセッションが増えてしまったことに対し、深くお詫び申し上げます。

当時の学会長であった北村先生から大会開催の打診を受けたときから、開催するならば完全対面だと決めていました。実務を担当できる人数が少ないことなど、理由はいくつかありましたが、最も大きな理由は会員相互のインフォーマルな交流の機会を設けたいとの気持ちでした。当時は新型コロナの流行期が周期的に訪れており、5 月頃までは大会の開催自体も予断を許さない状況でしたが、なんとか対面での開催を達成することができました。大会期間中、私は発表などを聞いて回ることはできませんでしたが、発表後の休み時間やちょっとした休憩時間などで会員同士のインフォーマルな議論が展開されていたことを見聞きしております。まさに私が目標としていたことが達成できたのではないかと思います、安堵しております。



（シンポジウムで挨拶をしている三船先生）

会員相互のインフォーマルな交流の機会を確保したいという思いから、懇親会開催も当初から準備を進めていました。こちらまで予断を許さない状況でしたが、なんとか開催を決定することができ、多くの方に参加していただくことができました。特に若手の研究者の方々が相互に、あるいは中堅やシニアの研究者の方々とともに交流されている場面を見て、懇親会を開催して本当に良かったなと感じました。ただ、懇親会は予想以上の申し込みをいただき、収容人数を超えてしまうおそれが出てしまいました。そのため、やむを得なく、当日の参加をお断りさせていただくことにしました。せっかく来ていただいたのなら是非とも皆様にご参加いただきたかったのですが、誠に申し訳ございません。深くお詫び申し上げます。

グルダイニュース 63 号では開催挨拶に際し、「学際的なグループ・ダイナミックス研究の展開」というタイトルを書かせていただきました。これは過去から現在まで、グループ・ダイナミックス研究とはまさに学際的研究であることから、そこに立ち返ろうという意図がありました。さらにその裏には、私個人の思いとして「科学的なグループ・ダイナミックス研究の推進」という目標もありました。新型コロナの流行に限らず、ロシアとウクライナの戦争やパレスチナとイスラエルの紛争、世界各地で生じる地震や洪水などの自然災害など、我々が集合的・集团的に対応しなければならない課題は山積しています。複雑で解決が困難な課題に対してアプローチする方法は、もちろん、多種多様にありますが、科学的なアプローチは其中で重要な位置を占め続けると私は信じています。そして、個別の科学分野から問題に深く取り組むだけでなく、多くの分野の知見を総合し、統合するような科学的アプローチも重要だと確信しております。そうした思いを持って、今回の大会を企画・運営させていただきました。

準備委員会企画シンポジウムは「同調現象解明に向けた学際的アプローチ」というタイトルを設定させていただき、鈴木真介先生（一橋大学）、出馬圭世先生（高知工科大学）、豊川航先生（University of Konstanz、理化学研究所）の 3 名にご登壇いただきました。神経科学や生態学など、様々な分野から「同調」現象にアプローチする方法をご紹介いただきました。また、特別講演は亀田達也先生（東京大学）にお願いしました。「社会科学の中のグループ・ダイナミックス：共感・分配・規範をめぐる一考察」というタイトルをいただき、まさに亀田先生が続けてこられた学際的なグループ・ダイナミックス研究の実際をご紹介いただきました。いずれにおいても、そのご発表内容が素晴らしかっただけでなく、特に若手の研究者から質問がなされ、それに答えていただくという機会があったことが非常に嬉しく思っています。科学の営みとして、若手・中堅・重鎮の区別なく、学術的な交流ができていたのではないのでしょうか。私の司会進行に関しては行き当たりばったりでご迷惑をおかけしたかと思いますが、少しでも会員皆様の中に残るものがあれば幸いです。

参加者の方々にはご迷惑をおかけした部分も多々あったかと思いますが、大きなミスやトラブルはなく大会を終えることができました。これも多くの方にお手伝い・ご協力いただいたおかげです。高知工科大学の日道俊之先生には非常に多くのお手伝いをいただきました。また、橋本剛先生、村上史朗先生、相馬敏彦先生、藤村まこと先生をはじめとした常任理事の先生方にも多大なるご支援をいただきました。学生スタッフにも積極的にお手伝いをいただきました。大会終了時に多くの方々から「良い大会だったよ」などのお声がけをいただき、本当に嬉しく感じましたが、それもひとえに大会にかかわってくださった皆様によるものだと思っております。心より御礼申し上げます。また、最後になりますが、来年度の立教大学での大会も盛会となりますことを心よりお祈り申し上げます。



(亀田達也先生による特別講演の様子)



(懇親会開催前の様子)

準備委員会企画シンポジウム

「同調現象解明に向けた学際的アプローチ」

氏名 仁科 国之（大阪大学）

日本グループ・ダイナミックス学会第 69 回大会は、3 年振りの現地開催でした。今年の準備委員会企画シンポジウムは「同調現象解明に向けた学際的アプローチ」というタイトルで行われました。今回のシンポジウムでは、心理学の古典的な現象の 1 つである同調について、神経科学者である出馬圭世先生、鈴木真介先生、社会心理学であり数理生態学者でもある豊川航先生の 3 名に公演をしていただきました。



出馬先生は社会的同調の神経メカニズムについて、鈴木先生はリスク選好の同調と神経基盤について、豊川先生は多数派同調から自己組織的に生まれる集合知について、それぞれの先生がこれまで行ってきた研究とそこから明らかになった同調現象についてお話しされていました。「同調」という現象に対して全員が異なる視点からその現象を解き明かそうとしておりとても刺激的な内容でした。どの先生のお話しも刺激的で心理学を主たる分野としている人たちにとっても面白かったのではないかと思います。もちろん、私にとってもとても面白く、それぞれの先生の話に引き込まれ聞き入りましたし、シンポジウムが終わったあとは満足感で満たされました。

今回のシンポジウムの中で、印象的だったのは社会的同調とリスク選好のどちらにも報酬系と呼ばれる脳部位が活動していたことでした。社会的同調は線条体、リスク選好は尾状核が関与しており、これらはどちらも快感情を感じる時に活動する部位です。これだけを見ると、人は快感情を感じるから同調を行うようにも思えます。ただ、同調することにそもそも快感情を感じるのでしょうか。個人的には快感情よりも、他の人と同じにしておけば目立たない、安心であるという感情な気がします。もちろん、目立たない、安心というのも快感情なのかもしれません。同調の研究は長い年月をかけて行われているのですでにされているとは思いますが、同調は快感情なのかどうか、快感情を感じるとしたらそれを感じる状況や行動に文化の違いは存在するのかなどなど、心理学の分野でも同調についてわかっていないことはまだまだありそうに感じました。単純ではあるけども心理学以外の分野の結果を聞くだけで、あらたな疑問や面白そうな視点が産まれてくることは、大会委員長である三船先生の分野外の視点を取り入れるだけでも心理的な現象への新たな視点が産まれてくるのでは、そしてそれに向き合うべきではないかという願いのもとに実施された今回のシンポジウムの目的は達成されているのではないかと感じています。

最後になりましたが、本大会およびシンポジウムを企画・運営していただいた運営委員の方々、登壇し発表してくださった先生方、参加記を執筆する機会をくださった学会の諸先生方に感謝申し上げます。

水野 景子（関西学院大学）

ご講演はまさに亀田先生ご自身の研究者人生を振り返るという内容でした。進化シミュレーション研究を行う中で、パラメータ値の設定が恣意的なものであると感じて研究が行き詰ったご経験などを赤裸々にお話しされていて、研究への情熱とこれまでの道のりが鮮明に伝わってきました。

ご講演の中の一つのキーワードが、「モデル」であったと感じました。集団・社会レベルの現象は、個人の行動の単なる加算ではなく、ときには非線形で、非常に複雑です。亀田先生は、そのような集団・社会レベルの現象を理解するために数理モデルを用いたアプローチの重要性を強調されました。私の理解するところでは、このアプローチは、現象を表現する数式である数理モデルを用意し、数式自体を仮説としてどの式がよいかを（典型的にはデータに対する当てはまりや次のデータに対する予測力によって）検討したり、数理モデル内のパラメータの推定値について考察したりする枠組みであると拝聴しました。数理モデルを非線形にすれば非線形でない現象を表現できるため、集団・社会レベルの複雑な現象の理解に役立ちます。



これまでの研究のご紹介では、自身の関与しない第三者への金銭の分配課題における意思決定でマキシミシ的な意思決定をする人が、自身のリスク化での意思決定課題においてリスク回避的な意思決定をする傾向にあることを示したご研究（Kameda, Inukai, Higuchi, Ogawa, Kim, Matsuda, & Sakagami, 2016）が取り上げられていました。このご研究では、両課題に同じ数理モデルをフィッティングさせ、モデル内の同じパラメータの推定値同士の相関を検討するというアプローチが行われています。このご研究の紹介を通して、別の場面での意思決定が心理的に同じ機序で起こっていることを示すうえでモデリングが有用であることを強調されていました。

会場には多くのキャリア初期研究者（ECR）の方がいらっしゃいました。私自身も ECR であり、亀田先生のご講演は私たち ECR にとって大きな刺激となりました。研究科の後輩たちも学会に参加していたのですが、皆同様に感銘を受けた様子で、帰阪後も熱心に感想を話し合っていました。会場にいらっしゃった多くの参加者が、新しいアプローチによる将来の研究の可能性や、研究自体の楽しさを感じられたのではないかと思います。

会場には多くのキャリア初期研究者（ECR）の方がいらっしゃいました。私自身も ECR であり、亀田先生のご講演は私たち ECR にとって大きな刺激となりました。研究科の後輩たちも学会に参加していたのですが、皆同様に感銘を受けた様子で、帰阪後も熱心に感想を話し合っていました。会場にいらっしゃった多くの参加者が、新しいアプローチによる将来の研究の可能性や、研究自体の楽しさを感じられたのではないかと思います。

末筆ながら、大会運営にご尽力くださいました先生方、スタッフの皆様に心よりお礼申し上げます。大会、懇親会とも大変楽しく参加させていただきました。

コラボ・リクエスト企画シンポジウム

「コラボ・リクエストのこれまでとこれから：コラボにいたる路を知る」

シンポジウム参加を振り返って

鈴木啓太（立命館大学）

このコラボ・リクエスト企画は、日本グループ・ダイナミックス学会で例年開催されているもので、企業が学会という場で解決したい課題を提案することで、研究者とのマッチングが促進されることを目的とされてきました。今年は、本企画が個別のマッチングの機会になることを超えて、「そもそもどうすれば企業と研究者がよりコラボできるようになるか」ということそのものを議論することが企画されました。「コラボにいたる路を知る」という副題に込められた趣旨は、そのようなものだったと理解しています。



はじめに、株式会社 HR ビジョンの長谷波様から、「日本の人事部」というメディアサービスについてお話いただきました。「日本の人事部」では、人と組織に関する情報を体系化し様々なメディアを通じて発信しています。その中で、人事パーソンが人・組織に関係することを学ぶ強いモチベーションがあること、講演や書籍、共同研究といった多様な形で、アカデミアとのコラボが始まっていることをご説明いただきました。続いて株式会社リバネスの前田様からは、学校をフィールドにした共同研究プロジェクトについてお話いただきました。学校の先生と研究者の間を橋渡しする存在の重要性や、研究者と企業をつなぐための様々なイベント（超異分野学会など）をご説明いただきました。最後に、前田様との共同研究者である正木先生と私の方から、学校との共同研究の実態についてお話しさせていただきました。

議論を通じて、コラボの形は想像しているより多様であると感じました。話題提供の内容は、「企業に明確な課題意識があり、それと専門家をマッチさせる」というものでは必ずしもありませんでした。正木先生からは、学校の先生とのヒアリングを通じて課題意識を明確していく作業についてお話がありました。これは、特定の課題を専門知識で解決するというより、組織・集団を対象に科学的にアプローチするメソッド全般が期待されていることを示す事例といえます。個別的なニーズとシーズを合致させることはハードルが高いかもしれませんが、まずは交流を持ち、そこからコラボの仕方を探っていけばいいというあり方は、いくぶんか楽に感じられるのではないのでしょうか。その意味で、「日本の人事部」や「超異分野学会」は、交流のプラットフォームとして有効に活用できればと感じました。質疑応答ではヒアリングの難しさや、コミットメント維持の難しさなど、実践的な困難についても意見交換がなされました。その全てがこのシンポジウムで解決されたわけではありませんが、この場でそういった問題意識を共有できたことは、「コラボに至る路を知る」上で、必要なステップだと感じました。

話題提供から質疑応答まで、今後のコラボの促進につながる要素がふんだんに盛り込まれていたように思います。最後になりましたが、このような機会をご用意いただいた先生方や運営スタッフの皆様に、改めてこの場を借りて御礼申し上げます。

コラボにいたる路を知りたい！

常任理事（渉外担当） 石井 敬子(名古屋大学)

心理学者が実社会の組織と共同研究を進め、実社会においても応用可能な知見を見出すような機会を生み出す場として、本学会ではこれまで大会時に「コラボ・リクエスト」を設けてきました。今年度は、コラボの機会を少しでも増やしていくために、研究者と現場の方々がうまくマッチングできるような仕組みや方略を検討するコラボ・リクエストワーキングチームを結成し、そのメンバーが中心となってシンポジウム（コラボ・リクエストのこれまでとこれから：コラボにいたる路を知る）を実施しました。シンポジウムの1つの狙いは、「社会的課題の解決に挑んできた心理学の考え方・視座に十分にアクセスしきれていないニーズ保持者と、現場の潜在的な課題に精通していないシーズ保持者とが出会い、コラボに至るにはどうすればよいか」という点でした。実社会における有用性の観点を踏まえたコラボという視点から全く遠く、それでいながら「自分がそれなりに人生捧げてやっていることの社会での無用さに、研究者としての自身の存在意義の危うさを非常に感じる」当方が司会だったこともあり、質疑応答では、これまでに豊富なコラボや共同研究の経験を有する話題提供者の方々に、過去の失敗談も交えながら「どうしたらうまいことコラボができるようになるのか、どうしたら自分の研究を知ってもらえるのか」といった疑問をまずはお尋ねしました。結局のところ、自身の研究を実社会の人々に知ってもらうための努力不足に尽きるというのが自戒を込めたこのシンポジウムの教訓でしたが、それと同時にその努力が活きるための橋渡しとしての場の存在の必要性を改めて感じました。今後もコラボ・リクエストワーキングチーム内で学会としてそのような場づくりのためにどのようなことが可能なのか、引き続き議論していきます。会員の皆様におかれましても、ぜひご協力のほどお願い申し上げます。



（登壇者は左から鈴木啓太先生、正木郁太郎先生、前田里美先生）

優秀論文賞

選考結果の報告

機関誌編集委員長 常任理事
橋本 剛（静岡大学）

本年度の優秀論文賞の選考対象論文は、実験社会心理学研究第 62 巻 1 号及び 2 号に掲載された原著論文 12 編、資料論文 1 編、Short Note 2 編の計 15 編でした。これらの中から優秀と考えられる論文 3 編を選び、1 位から 3 位まで順位をつけて投票するよう、8月31日を締め切りとして編集委員にお願いしました。選考対象論文の著者となっている編集委員を除き、18 名の編集委員から投票が届きました。規程に従って、1 位票に 3 点、2 位票に 2 点、3 位票に 1 点を与えて集計しました。その結果を基に、9月22日に優秀論文賞選考委員会を開催して協議した結果、下記論文に優秀論文賞を授与することに決定いたしました。

杉山高志先生・矢守克也先生
「Days-After」の視座を用いた防災活動の分析
(第 62 巻第 2 号, pp. 49-63)

受賞おめでとうございます。ご研究の益々のご発展をお祈り申し上げます。



（総会後の表彰の様子：右手は受賞者の杉山高志先生，左手は会長の坂田桐子先生）

優秀論文賞

杉山 高志・矢守 克也 (2023).
「Days-After」の視座を用いた防災活動の分析
実験社会心理学研究, 62 (2), 49-63.

杉山高志 (九州大学)

この度は、拙稿を優秀論文賞にご選定いただき、誠にありがとうございました。高知県黒潮町の住民の皆様や黒潮町役場の職員の皆様、幡多広域観光協議会の皆様、黒潮町観光ネットワークの皆様をはじめ、本研究にご支援、ご指導を賜ったすべてのみなさまに、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

拙稿は、高知県黒潮町で展開された防災活動を Days-After の視座から分析を試みた研究です。Days-After とは、まだ起こっていない災害現象を、もう起こったこととして捉える姿勢・語り方のことであり、災害の発生を確率として捉えるのではなく、将来必ず起こるものとして捉えて語る視点のことです。この視点は、災害の発生が不可避だととらえるものであり、時として災害に対する諦めを引き起こしかねない視点です。しかし、拙稿では、逆説的ではありますが、災害の発生を確実なものとして捉える Days-After の視点が、黒潮町の住民を防災に対する前向きな態度に変容させていたことを明らかにしました。

拙稿は、様々な葛藤の中で長期的な調査を続けた結果をまとめたものです。拙稿の中でも触れていますが、「また来たん？あんたが来るきに、津波も来るんだわ」と黒潮町のある地域住民から言われたこともあり、私が進める地域防災の研究・実践活動が本当に地域のベターメントにつながっているのか、自問自答を繰り返しながら調査を続けました。防災・減災、ひいてはフィールド研究や現場研究そのものが一筋縄ではいかないことを、我が身をもって感じた経験でした。内閣府が 2012 年 3 月 31 日に発表した南海トラフ地震の巨大な津波想定によって、34m という日本一の高さの津波が想定された黒潮町では“疑似被災”とも呼べる現象が生じ、防災・減災の功罪両側面が色濃く表出していました。その中で、一調査者の私は無色透明な観察者になることはできず、自身の存在が地域に与える影響を常に考え続けていました。落語は笑い、浪曲は涙、講談は怒りを原動力に芸を磨き上げてきたという言葉がありますが、拙稿は葛藤を力の源にして編み上げられたような気がしております。フィールド研究、現場研究の難しさを実感するとともに、奥深さを学ぶことができました。

今後も、研究者として、防災研究・実践に資するための研究・教育・社会貢献活動を続けてまいりたいと考えております。学会で議論してくださった皆様、査読や審査してくださった先生方に改めて御礼申し上げます。今後も先生方からご指導を賜れますと幸いです。この度は、誠にありがとうございました。



2023 年度優秀学会発表賞 選考結果のご報告

2023 年度優秀学会発表賞選考委員長 村上 史朗（奈良大学）

2023 年 9 月 23 日～24 日に高知工科大学において開催された日本グループ・ダイナミクス学会第 69 回大会において、「2023 年度優秀学会発表賞」の選考が行われました。

審査過程は、優秀学会発表賞選考規程に沿って、以下の手順で進められました。はじめに、論文集原稿を対象とした事前審査では、部門ごとに理事全員による投票が行われ、各部門上位 3 位までがノミネート発表として選出されました（ただしショート部門は同順位につき 4 発表を選出）。当日の二次審査では、理事 3 名の審査者がそれぞれのノミネート発表に参加して、内容とプレゼンテーションを各 5 点で採点しました。最終的に、一次審査の投票数（1 票を 1 点とカウント）と二次審査の採点を加算する方法で、各部門で総合得点が最も高い発表を受賞候補者として、その候補者案について選考委員（理事）の承認を得て、最終的に受賞者を決定いたしました。その結果、今年度の同賞は、以下の発表における第一発表者の方々に授与されることとなりました（敬称略）。



<ロング・スピーチ部門>

- ・第一発表者：ターン 有加里ジェシカ（東京大学）
- ・発表題目：能力差のある集団内でのタスク分担：ボランティアのジレンマを用いた検討
- ・共同発表者：大坪 庸介、橋本 剛明、唐沢 かおり

<ショート・スピーチ部門>

- ・第一発表者：森 隆太郎（東京大学）
- ・発表題目：リアルタイムな協働における能動的な協力行動と返報
- ・共同発表者：高橋 茉優、花木 伸行、亀田 達也

<English Session 部門>

- ・第一発表者：Tomotaka Okuyama (Hitotsubashi University)
- ・発表題目：Why Do Japanese People Continue to Wear Masks?: From the Perspectives of Pluralistic Ignorance
- ・共同発表者：Yuri Miyamoto

<ポスター発表部門>

- ・第一発表者：清水 佑輔（東京大学）
- ・発表題目：人々が思うより高齢者は健康である：態度変容に向けた事前登録実験
- ・共同発表者：鈴木 雅、畠 由佳子、榎 敏朗

受賞者の皆様、おめでとうございます。受賞者は、受賞した内容に関する論文を第一著者として『実験社会心理学研究』に優先的に投稿する権利を有し、「特集論文」に準じて主査および副査 1 名で審査を受けることができます。ただし、投稿の権利は受賞発表日（2023 年 10 月 10 日）から 1 年間に限って有効です。

ターン 有加里ジェシカ・大坪 庸介・橋本 剛明・唐沢 かおり
能力差のある集団内でのタスク分担：ボランティアのジレンマを用いた検討

ターン有加里ジェシカ（神戸大学）

この度は名誉ある賞を賜り、大変光栄に思います。初めに、大会運営にご尽力くださった先生方、優秀学会発表賞の選考委員の先生方、本発表に貴重なお意見やご質問をくださった先生方、本発表を聞きにお越しくくださった皆様に厚く御礼申し上げます。

受賞の対象となった研究は、「ボランティアのジレンマ」（集団の中で最低1人の成員がコストを負担すれば公共財が生み出される状況）において、公共財を生み出すときにかかるコストが成員ごとに異なる場合、①どのようにコストを分担することが理想とされるのか、②実際にはどのようにコストは分担されるのかという問いを検討したものです。経済ゲーム実験などを通じてこれらの問いを検討すると、理想と現実の間に差が生じることが明らかになりました。そこで、新たに③なぜ理想と現実の間に差が生じるのかという問いを立てて、複数の可能性を検討しました。

実は、①と②に関しては2年前のグループ・ダイナミクス学会で発表させていただきました。しかし、その時点では理想と現実の差が明らかになったばかりで、③に関しては未解明でした。2年前の発表の際、「理想と現実の差の要因を明らかにできたら、また発表します」という趣旨の宣言をしてしまったものの、その後は出産や育児などでなかなか実験を行えずにいました。実験を行えなかった理由としては、実質的な障壁（子どもがいつ熱を出すかわからない等）も精神的な障壁（実験を行うことが何となく「怖い」と感じる等）もあったと思います。しかし、本当に恵まれていることに、実質的な障壁に関しては家族のサポートを得ることができたおかげで、また、精神的な障壁に関しては共著者の先生やお子様がいる先輩のサポートを得ることができたおかげで、実験を遂行することができました。この場を借りて心から感謝申し上げます。

このように思い入れのある研究成果だからこそ、今回の受賞の知らせを受けた時は、喜びもひとしおでした。その一方で、本研究が残した多くの課題も思い起こされ、これから真摯に研究に取り組むべきだと気が引き締まる思いにもなりました。今後も一步一步着実に研究を積み重ねていけるよう励んでまいります。



森 隆太郎・高橋 茉優・花木 伸行・亀田 達也
リアルタイムな協働における能動的な協力行動と返報

森 隆太郎 (東京大学)

この度は、優秀学会発表賞をいただき大変光栄です。大会の運営をはじめご尽力いただいた先生方、選考委員の先生方、発表にコメントをくださった先生方、また日ごろより一緒に研究してくださっている皆様方に、改めて感謝申し上げます。

私のショート・スピーチでは、タダ乗りの誘因のもとでの協働、という古典的な問題を扱いました。「みんなで取りくむことに成功すればより良いが、各個人は取りくむ動機を持たない」社会的ジレンマの状況は、人の集まりに普遍的に生じる悩ましさの一つで、たくさんの研究がなされています。本研究は、手番制のように意思決定のタイミングが限定されている訳ではない、誰もがいつでも決められる状況(=「リアルタイム状況」)においては、この悩ましさの一部が自然な形で解決されるのではないかというアイデアについて、整理し実験的に検討したものです。

上のようなアイデアの出発点は、1990-2000年ごろに山岸俊夫先生のゼミなどで取りくまれていた「順序選択つき囚人のジレンマゲーム」というパラダイムです。相手が互恵的に振る舞う(協力には協力を、非協力には非協力を返す)ことを予測するなら、不確実なまま放っておくより、先に協力してみせて相手の悲観の可能性を払拭するほうが良いと考える人がいるかもしれません。しかし、そのような(ある種)論理的な予測に反して、当時の大学生データでは先手を選ぶ/好む人は少ないという話でした。示唆に富む検討に私たちが付け加える展開があるとすれば、リアルタイムという日常的な状況が、意思決定の順序を人々自らが選ぶという構造をまさに含んでいる、という指摘と、さらにそこでは好む好まざるに関わらず先手役を担う人の不在はジリ貧につながる(従ってかえって先手役を担う理由が増す)という考察にあると思っています。

学会当日は「協力」というセッションの中で、関連する研究と隣接して発表する機会をいただきました。上で書いた内容は、Q&Aやその後の議論を通じていたった暫定的な整理です。熟議的なプロセスが最もよく働くのは、共通する検討のフレームを持ちながら異なる考えを保った人々の間であるという議論があります。今回は、まさにそのような有意義で充実した時間をいただいたことを、大変感謝しております。

末筆になりますが、大会を通じたハイライトの一つは、「同調」に関する刺激的なセッションを拝聴したこと、その後の懇親会で多くの方々と議論(お喋り)できたことでした。とても思い出深い機会をいただき、ありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



Tomotaka Okuyama・Yuri Miyamoto

Why Do Japanese People Continue to Wear Masks?: From the Perspectives of Pluralistic Ignorance

奥山 智天 (一橋大学)

この度は名誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。審査に携われた選考委員の先生方、当日の発表で大変重要なお意見を下さった先生方、そして第 69 回大会を企画・運営して下さいった大会準備委員会の先生方に深く御礼申し上げます。私は今回初めて日本グループ・ダイナミックスの年次大会に参加させて頂きましたが、非常にアットホームな雰囲気、たくさんの先生方とお話する機会を得ることができ、大変充実した学会参加となりました。



今回の English Session で発表させて頂いた研究は、新型コロナウイルス感染症の脅威が下火となり、世界中がポストコロナの時代へと移行していく中で、なぜ日本社会においては依然として多くの人がマスク着用を続けているのだろうという素朴な疑問からスタートしています。日本人のマスク着用行動には様々な社会・文化的要因が影響していると考えられますが、私たちの研究では特にマスク着用規範が維持されるメカニズムに着目し、多元的無知という観点から検討を行いました。4 時点における縦断的調査を行った結果、自分自身はマスクを着用していない他者に対してネガティブな評価を下さないが、周りの人はマスクを着用していない自分に対してネガティブな評価を下すだろう、という認知のズレが見られました。さらに、この自己評価と（推測された）他者評価にズレがある人、すなわち多元的無知の状態にある人、はそうでない人に比べてマスクを着用する傾向にありました。これより、人々のマスク規範に対する他者態度の誤推論（＝多元的無知）が、マスク着用規範を維持する一因として機能している可能性が示唆されました。一方、本研究では解明されなかったリサーチクエスションもあります。すなわち、多元的無知はいつ無くなるのか、という疑問です。本研究では4つの時点においてデータ収集を行っており、自己評価と（推測された）他者評価のズレは、日本政府による脱マスクの全体的なアナウンスがあった時点3または時点4において見られなくなるだろうと予測していましたが、実際には4つの時点全てでズレが見られました。今後はさらなる追跡調査を行い、自己評価と（推測された）他者評価のズレがいつ無くなるのか、または無くならないのかを検証することが出来ればと考えています。

最後になりますが、以上のような4時点の縦断研究を行うにあたり、研究室の様々な先生方から非常に重要なお指摘を多数頂きました。特に、指導教員である宮本百合先生には、本研究に限らず、日頃から非常に熱心で手厚いご指導をして頂いています。宮本先生のご指導が無ければ本賞を頂くこともなかったと思います。深く感謝申し上げます。この度はありがとうございました。

清水 佑輔・鈴木 雅・畠 由佳子・榊 敏朗

人々が思うより高齢者は健康である：態度変容に向けた事前登録実験

清水 佑輔（東京大学、日本学術振興会）

この度は名誉ある賞に選出いただき、大変光栄に存じます。選考委員の先生方、並びに大会当日に貴重なコメントを下された皆様に心から感謝申し上げます。本研究では「高齢者に対するネガティブな態度をどうすれば軽減できるのか」について、計3つの調査・実験を実施しました。特に2つの実験では事前登録を行っています。

高齢者は一般に「病弱であり、寝たきりの人も多い」といったネガティブな認知が存在します。Palmoreによる、加齢に関する正しい知識を問うクイズには、「およそ8割の高齢者は健康で、ふつうの生活を送るのにさしつかえない」という記述に対して、はい/いいえの2択



で回答するというものがあります。この問題、実は「はい」が正解です。日本で実施された調査では、正しく答えられる割合は60%程度でした（2択なので、テキトーに回答しても50%は正解できます）。このように、高齢者は病弱であるといったステレオタイプは広く存在しており、これを変容することで高齢者に対するネガティブな態度を軽減できるのではないか、というのが本研究の着眼点です。

本年度の大会には、非常に多くの先生方が参加され、ポスター会場がずっと盛り上がっていたのが鮮明に思い出されます。幅広い大学・研究機関の先生方と、自分のポスターの前で熱い議論ができたことは大きな宝となりました。また懇親会では、初めは緊張しながらも、多くの先生方とお話することができました。美味しい食べ物やお酒と共に、このような機会を設けてくださった運営の先生方に心より感謝申し上げます。

ところで、本研究は第67回大会の「コラボクエスト企画」をきっかけとした共同研究の成果です。定期的に研究討議を重ね、本原稿執筆時（2023年11月）までに計6件の調査を実施致しました。院生や学部生にとって、自分の研究室以外での共同研究に携わることは非常に有意義かつ刺激的な経験です。学会大会の場で貴重な出会いの機会を頂いたことに心より感謝申し上げますと共に、このような企画が今後も開催されることを願うばかりです。

最後になりましたが、研究室外での共同研究活動を快く容認・応援してくださっている指導教官の唐沢かおり教授にも、この場を借りて感謝申し上げます。多くのコミュニティでの研究活動を通して学んだ成果を、引き続き博士論文の執筆やゼミに還元する所存です。メインテーマの研究が疎かとなり、喝を頂くことのないよう今後も努力して参ります。

編集委員長 橋本 剛 (静岡大学)

副編集委員長 中島健一郎 (広島大学)

今年度から実験社会心理学研究に書評が掲載されることになりました。第 63 巻 1 号にありますし、すでにご覧いただいた会員のみなさまもいらっしゃるのではないかと考えております。今回の書評も評者の先生方の「思い」が端々に含まれており、読み応えのある内容になっています。きっと会員のみなさまも同じ気持ちになっていただけるのでは...と思っております。これからは「何が会員のみなさまのためになるのか」という点を大事にしながら、実験社会心理学研究の発刊とアップデートをすすめていきたいと思っております。

これまでのぐるだいニュースの繰り返しになりますが、編集委員会では「論文を評価するのは読者であり、その機会を作るのが仕事」という精神のもとで作業を進めております。これが可能なのは、ひとえに論文を投稿してくださっている会員のみなさまと、審査に協力してくださっている査読者のみなさまのおかげです。心よりお礼申し上げます。今後も読者のみなさまの幅広いニーズに応えることを目指し、多くの論文をお届けできるよう努めていきます。これからも実験社会心理学研究をよろしくお願いいたします。

実験社会心理学研究 2023 年度 63 巻 2 号 — 掲載予定論文

(2024 年 2 月発行予定／早期公開済み)

原著論文

- 菅さやか・太幡直也・宮本聡介
実在性に関する後説明効果の検証

Short Note

- Goun Park, Keiko Ishii
Empathy and need for closure are linked to moral foundations and political orientation: A replication study in Japan
- Yukiko Nishimura, Haruka Shimizu, Ken'ichiro Nakashima
Effects of parental self-esteem on depression, autonomy, and career consciousness among children: A replication study focusing on the mediation of parenting behaviors
- Yuka Ozaki, Daigaku Matsuda
Using prompts to promote desirable organizational behaviors: An experience sampling intervention study

書評

■ 熊谷智博

縄田健悟 著（2022 年）「暴力と紛争の“集団心理” いがみ合う世界への社会心理学からのアプローチ」

■ 三浦麻子

ゾルタン・ディエネス 著／石井敬子・清河幸子 訳（2023 年）「科学としての心理学－科学的・統計的推測入門」

国際化支援

常任理事（渉外担当） 石井 敬子(名古屋大学)

国際学会発表支援制度について

2023 年度は、前年度に引き続き、渡航費のみならず、対面及びオンラインで開催される学会の参加費についても支援の対象としました。選考委員会による審査の結果、6 名の会員の渡航費、2 名の会員の参加費をそれぞれ支援しました。本制度では、締め切りの時点で発表予定の研究だけでなく、すでに当該年度に学会発表を行った研究についても支援対象となります。また、他学会の支援制度との重複受給も可能です。詳細は以下のページをご参照ください。来年度に向けて、ぜひ皆様からのご応募をお待ちしています。

関連ページ： <http://www.groupdynamics.gr.jp/support.html>

研究の国際化支援制度(英文校閲補助)について

この制度は、本学会会員の研究の国際化を支援するため、会員が自らの研究成果を英文誌に投稿する際の英文校閲代金の一部を補助するものです。昨年度は 2 名の会員に補助を行いました。今年度も 3 月末まで引き続き募集を行っています。応募者の年齢制限はなく、複数論文の校閲費を合算して申請できます。また、過去に補助を受けた会員の方々も、当該年度以降に改めて申請することが可能です。詳細は以下のページをご参照ください。ぜひ皆様からのご応募をお待ちしています。

関連ページ： http://www.groupdynamics.gr.jp/support_international.html

事務局からのお知らせ

常任理事（学会事務局長）

相馬敏彦(広島大学)

一般会員の会費の値下げについて

2024 年 4 月より一般正会員の年会費を 1,000 円値下げし、正会員（一般）の冊子郵送なし 9,000 円、冊子郵送あり 10,000 円といたします。2023 年度の学生正会員の値下げに引き続き、一般の正会員の値下げを行うことで、多くの方に本会の活動にご参加いただき、学会の活性化を図る狙い입니다。お近くに入会をお考えのお知り合いがいらっしゃれば、ぜひこの機会にご入会をお勧めください！

会務報告への J-STAGE でのアクセスについて

機関誌「実験社会心理学研究」について、62 巻 1 号より J-Stage 上での公開を基本とし、冊子送付は希望者のみといたしました。これに伴い、会務報告についても、基本的に J-Stage 上でアクセス可能としました。ただし、会員のみで共有すべき情報も含まれるため、閲覧にはパスワードが必要です。会務報告の公開ごとに、会員の皆様には事務支局より「会務報告公開のご案内」と題したメールが届きます。その本文に、閲覧に必要な購読者番号とパスワード（PW）を記載しておりますのでご確認ください。なお、62 巻 1 号～63 巻 1 号までの当該情報は、まとめて 2023 年 11 月 21 日にメールで送信しております。ご不明な点がございましたら、事務局までお問い合わせください。

書評について

書評掲載を機関誌「実験社会心理学研究」63 巻 1 号よりはじめました。書評を書いてほしい本、ぜひ書評を書きたいという本がありましたら、広報担当（office@groupdynamics.gr.jp）にお知らせください。お待ちしております。

グルダイ学会関係連絡先

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等の変更、会費納入、機関誌等の未着・メールマガジンなどの配信先の登録・変更・停止等の連絡先として、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。

また、論文投稿先・審査書類送付先も中西印刷株式会社となっております。詳細は下記をご覧ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

事務支局【入退会、住所・所属等変更、その他お問い合わせ先】

日本グループ・ダイナミックス学会 事務支局

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入る

中西印刷 (株) 学会フォーラム内

TEL : 075-415-3661 FAX : 075-415-3662

E-mail : jgda@nacos.com

学会運営・对外業務関連

日本グループ・ダイナミックス学会本部事務局

〒730-0053 広島県広島市中区東千田町 1-1-89

広島大学大学院人間社会科学研究科 相馬敏彦 研究室

TEL : 082-542-7076

E-mail : sec-general@groupdynamics.gr.jp

投稿論文・学会誌編集関連【論文投稿先・審査書類送付先】

日本グループ・ダイナミックス学会 編集事務局

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入る

中西印刷 (株) 営業部編集校正課内

TEL : 075-441-3155 FAX : 075-417-2050

E-mail : jjesp-hen@groupdynamics.gr.jp

広報関連【ぐるだいの編集・記事の投稿、メールマガジンへのニュース記事投稿、 新刊案内や研究会案内等のニュース記事、書評、公募情報など】

〒811-1313 福岡市南区日佐 3-42-1

福岡女学院大学 藤村まこと 研究室 (広報担当 常任理事)

E-mail : office@groupdynamics.gr.jp

心 理 学 評 論

Vol. 66 (2023) の発行予定

- No. 1 2023 年 9 月 特集：アートと心理学
No. 2 2023 年 10 月 一般論文
No. 3 2023 年 11 月 特集：Developmental Cybernetics：
子どもとロボットのインタラクションから子どもとロボットの関係性へ
No. 4 2024 年 2 月 一般論文
年間 4 冊発行し、購読料は個人予約に限り 8,000 円、機関の場合は 15,000 円です。

Vol. 65, No. 3 (2023 年 3 月発行)

特集：伴侶動物のころを探る

編集：黒島妃香

- 黒島妃香 比較認知科学における伴侶動物研究の進展
—特集号「伴侶動物のころを探る」の刊行に寄せて—
今野晃嗣 イヌの「性格」に関する研究の展開
堀 裕亮 イヌ性格研究の“精緻化”に向けて—今野論文へのコメント—
高木佐保 ネコの認知研究の最新動向と今後の展望
後藤和宏 ネコの社会的認知研究に対する期待—高木論文に対するコメント—
山根明弘 人間との関わりの中で変化するイエネコの社会的行動
荒堀みのり ネコの社会行動のこれまでと未来—山根論文へのコメント—
瀧本（猪瀬）彩加 家畜ウマにおけるヒトの社会的シグナルの知覚能力
平田 聡 心の多様性とウマ研究—瀧本論文へのコメント—
関 義正 オウム・インコの発声行動と社会性における家禽化の影響
服部裕子 鳥類の音楽性と家禽化—関論文へのコメント—
甲田菜穂子・加瀬唯香 動物介在介入の有効性：イヌ、ヤギ、ウサギ、モルモットの比較から
濱野佐代子 動物介在介入の効果に影響を及ぼす要因—甲田論文へのコメント—

Vol. 65, No. 4 (2023 年 3 月発行)

論 文

- 太田一実・滝沢 龍 高齢者・認知症ケアへのコミュニケーションロボットの活用に関する文献レビュー
藏口佳奈・入戸野宏 成人顔のかわいさ：新たな魅力評価次元として
神原 歩 自己の客観性を過信する傾向についての一考察
—研究の系譜とその適応的意義の検討—

特集：心理学と人類史研究の接点

編集：川畑秀明・齋木 潤

- 平川ひろみ 土器製作者とモーターハビット—民族考古学的知見に関連して—
川畑秀明 心理学と考古学とのさらなる接点を求めて—平川論文へのコメント—

心 理 学 評 論 刊 行 会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学文学部心理学研究室内

TEL: 075-753-2753 FAX: 075-753-2835

E-mail: hyoron@psy.bun.kyoto-u.ac.jp

<http://www.sjpr.jp/>

郵便振替：01080-7-1208

北大路書房

〒603-8303 京都市北区紫野十二坊町12-8

☎ 075-431-0361 FAX 075-431-9393

<https://www.kitaohji.com>(価格税込)

〈よそおい〉の心理学

—サバイブ技法としての身体装飾— 荒川 歩, 鈴木公啓, 木戸彩恵編著 A5・280頁・定価3740円 なぜ、私たちは今日も〈よそおい〉続けるのか？ 普段の役割を降りるツール、自他の関係調整ツール、ジェンダーワークといった心理的社会的機能の観点から、衣服、化粧、ピアッシングなどの身体装飾の行為を考察。

装いの心理学

—整え飾るころと行動— 鈴木公啓編著 A5・304頁・定価2970円 身体装飾・変工の心理に関する入門書。第1部では、化粧、衣服、ピアス、いれずみ、美容整形、瘦身等の装いがどのような意味・意義を有するのか、バランスよく解説。第2部では、コスプレや化粧療法等、関連テーマを紹介。

ドムヤンの学習と行動の原理^{〔原著第7版〕}

M. ドムヤン著 漆原宏次, 坂野雄二監訳 B5上製・424頁・定価7920円 学習心理学の泰斗・ドムヤンによる米国で評判のテキスト、待望の邦訳。行動の誘発、強化、制御、消去、変容に関わる学習の原理、およびその広範な活用について、神経科学の裏づけを加えつつ新たな研究知見を紹介。

感情制御ハンドブック

—基礎から応用そして実践へ— 有光興記監修 飯田沙依亜, 榊原良太, 手塚洋介編著 A5上製・432頁・定価6160円 本邦で展開されてきた多彩な感情制御研究を一望できる書。基礎理論に始まり、社会・人格・認知・発達・臨床・教育、さらには経済・司法・労働までの各分野における最新知見を8部31章21トビックスで紹介。

パーソナリティのHファクター

—自己中心で、欺瞞的で、食欲な人たち— K. リー, M. C. アシュトン著 小塩真司監訳 四六・208頁・定価2640円 自分を利するために計算高く他人を操る、特別な地位や権利を得るに値すると自惚れている…… Hファクターの低い人々。パーソナリティのHEXACOモデルを提案した心理学者たちが、彼らに特徴的な性格傾向や行動様式を解説する。

障害から始まるイノベーション

—ニーズをシーズにとらえ直す障害学入門— 田中真理, 横田晋務編著 A5・208頁・定価2970円 障害を社会モデルから捉え直し、アクセシビリティを高める支援技術を解説する。さらには福祉社会学や工学、人類学など様々な専門分野からみたユニバーサルデザインの研究知見を紹介。イノベーション創出のヒントを提供。

コーチング心理学ガイドブック

S. オリオーダン, S. パーマー編著 徳吉陽河監訳 A5・336頁・定価4620円 心理学に基づくコーチングの基礎や研究等を紹介。信頼関係の築き方やアセスメント等の主要トピックから、会社やスポーツなどでの応用、コーチング心理学の限界と未来まで包括的に解説。個人と組織の持続的成長やウェルビーイング向上に貢献したい実践家・研究者必読の書。

実践！健康心理学

—シナリオで学ぶ健康増進と疾病予防— 日本健康心理学会編集 A5・208頁・定価2750円 医療・看護、福祉、産業、教育など、多様な人が活用できる健康心理学の「実践ガイド」を提供。まず、シナリオ形式で健康心理学の視点と方法論が役立つ状況を例示し、対応の仕方を解説。次いで、背景理論もしっかりと説明。

心理学って面白そう！
どんな仕事で活かされている？

シリーズ **心理学と仕事** (全20巻) **完結！** シリーズ 監修 太田信夫

●A5判・148～232頁・定価2200～2530円

- | | | | | |
|-------------|------------|------------|-------------|----------------|
| 1 感覚・知覚心理学 | 2 神経・生理心理学 | 3 認知心理学 | 4 学習心理学 | 5 発達心理学 |
| 6 高齢者心理学 | 7 教育・学校心理学 | 8 臨床心理学 | 9 知能・性格心理学 | 10 社会心理学 |
| 11 産業・組織心理学 | 12 健康心理学 | 13 スポーツ心理学 | 14 福祉心理学 | 15 障害者心理学 |
| 16 司法・犯罪心理学 | 17 環境心理学 | 18 交通心理学 | 19 音響・音楽心理学 | 20 ICT・情報行動心理学 |

心理学概論

◎Well-Being な生き方を学ぶ心理学

大坊郁夫編

持続可能性を高め、よく生きるための心理学入門テキスト。
2970円

続：特別支援教育における コーディネーターの役割

◎事例を通して考える本人・保護者中心の連携支援体制の展開
藤村励子・郷右近歩著
1320円

家族心理学

◎生涯発達から家族を問う
相良順子編
個人の発達と家族の発達の関わりをワークを取り入れ解説。
2530円

心の専門家養成講座⑩ 司法心理臨床実践

河野壯子編
警察、少年鑑別所、家庭裁判所、刑務所などでの有効な心理臨床とは。
3520円

何のためのテスト？

◎評価で変わる学校と学び
K・カーゲン＋S・ギル著／
東村知子・鮫島輝美訳
教育システム変革に向けて。
2750円

PAC分析研究・実践集③ PAC分析

◎支援ツールでここまでできる
PAC分析学会編
使い方を実践例から解説。
2860円

主體的に学ぶ 発達と教育の心理学

高村和代・安藤史高・小平英志編
教職課程コアカリキュラム対応テキスト。課題・テストも充実。
2530円

社会的子育ての実現

◎人とながかり社会をつなぐ、保育力アップと子育てと保育ソーシャルワーク
藤後悦子監修／柳瀬洋美他編著
支援に必要な知識とは。
2640円

家族・関係者支援の実践

◎システムズアプローチによるさまざまな現場の実践ポイント
中野真也・吉川悟編
新たな対人支援にむけて。
3300円

心の専門家養成講座④ 心理支援の理論と方法

狐塚貴博・田附紘平編
複雑かつ多岐にわたる心理支援について、実践例を交えて解説。
3520円

テストは何のためにあるのか

◎項目反応理論から入試制度を考える
光永修彦編著／西田亜希子著
大学入試制度改革への提言。
3630円

やってみよう！ 実証研究入門

◎心理・行動データの収集・分析・レポート作成を楽しもう
古谷嘉一郎・村山綾編
2860円

コーチング心理学 概論【第2版】

西垣悦代・原口佳典・木内敬太編著
好評だった初版に新たな知見をふんだんに盛り込んだ改訂版。
3080円

学校心理学プラクティス① 別室登校法

◎学校と適応指導教室での不登校支援と集団社会化療法
中村恵子著
チームを組んだ支援の方法。
2420円

地域からみる女性の ライフ・キャリア

◎主體的に働き方・生き方を選択できる社会の実現のために
小倉祥子著
全国調査から分析する。
3080円

高齢者による 次世代の育児・教育

◎「生きる力」を育むネットワークからソーシャルキャピタルへ
諏澤ひろえ著
4400円

なぜあなたは国際誌に 論文を掲載できないのか

◎誰も教えてくれなかった本場に必要なこと
加藤 司著
全ての悩める研究者へ。
2970円

動かして学ぶ！はじめての テキストマイニング

◎フリー・ソフトウェアを用いた自由記述の計量テキスト分析
樋口耕一・中村康則・周景龍著
2420円

コミュニケーション の社会心理学

◎伝える・関わる・動かす
岡本真一郎編
最先端の研究を幅広く解説。
3520円

自閉スペクトラム症者の エピソード記憶とモニタリング

◎新たな障害仮説に向けて
山本健太著
自閉症についての新仮説。
5280円

転職における キャリア支援の オートエスノグラフィ

土元哲平著
その連の自己省察を描く。
7700円

欧州の教科書にみる 多様化する家族

◎イギリス・フランス・ドイツ・イタリアの小学校教科書に描かれた次世代へのメッセージ
塘利枝子著
5500円

小さな声を小さなままに

◎私の「福祉心理学入門」から
久保田美法著
当事者の声に触れ、感じる、福祉心理学への誘い。
2750円

iAnoviでトライ！ 統計入門

◎フリーソフトウェアで始める科学データの分析
眞嶋良全・永井曉行編
2750円